

校内研究 小嘶

総合的な学習や探究型学習についての情報です。
校内研究の学びへの参考にしてください。



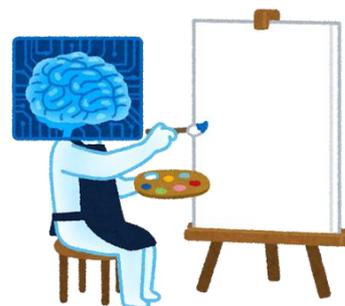
R7.07.10 4号

ICT 支援員の佐竹さんが、近隣の小学校でもサポートされていることは、ご存じのことと思います。その佐竹さんから、本校の ICT の取組が7月の支援員通信に載せたことを伺いました。本校の採点ソフト等の活用は、とても秀でていそうです。そして、それ以上に近隣の小学校での ICT の取組、特に児童のタブレット活用とのその能力は、今の中1以上だと聞いています。最近の活動としては、6年生は自分たちが調べた環境問題について小1～5年生に向けて説明（プレゼン）したり、保護者に移動教室について説明したりしているとのこと。自ら調べまとめ、相手に伝える（教える）活動は、アクティブラーニングとして、最も学習効果が高いと示されています。そのような活動を積んできた小学生に、一方的に情報を与えるような授業、聞くだけ、言われたことだけをやらされるだけでは、学ぶ意欲や興味を無意識に無くさせる授業に成りかねません。

なぜ小学校の先生がたは、どの教科でも自ら調べさせたり、相手に伝えさせたりする活動に力を入れているか、それらを理解するために、今一度「教員に最も求められる能力・技能」を振り返ります。中学校では、教科担任制であるので、教科で扱う内容は異なります。しかし、学校全体として生徒に付けたり伸ばしたりする能力や技術は、大きな目的に沿っているはず。中学校の学びでも必要とされる力を、再確認してください。

テーマが大きいので、生成 AI に尋ねてみました。答えには根拠も示すように指示をしたので、平均的な答えではないはず。まとめだけでもお読みください。

問いは、「今の教員に最も求められる能力・技能」です。そして、①根拠を「中教審の答申」、「教育評論家の意見」、「企業の提言」を示す。②何ができる力なるのか。③どのような生徒・人財を育めるのか。です。



1 主体的・対話的で深い学びを設計・運営する「学びのプロデュース力」

(思考力・創造力・探究型学習の推進)

【根拠】

中央教育審議会（2021年答申）で「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立が強調され、教員には授業を一方向型から、探究・協働へと転換する力量が求められている。

教育評論家の苦野一徳氏は「学校は自由を保障する場所」であり、子どもの問いを深める場を設計することが教師の役割と指摘している。

一般企業（リクルート・経団連調査）でも「課題設定力」「協働力」「主体性」を持つ人材が強く求められており、それを育成する授業が必要と提言している。

【何ができることが求められるか】

子どもが自ら問いを持ち、それを深める探究学習を設計できる。

多様な意見を引き出し、対話を通じて思考を広げる場をつくれる。

単元をゴール（知識習得）だけでなく、プロセス（問いの深まり）を重視して組み立てられる。

【どのような子どもを育てる力か】

答えのない問いに取り組む探究心を持ち、仲間と協働しながら学び続ける子ども。

社会の課題に対し、自ら気づき考えを持つ主体的な人材。
失敗を糧に挑戦し続けるレジリエンスを育てる。

2 子どもの多様性を理解し、一人ひとりに応じた支援を行う「関係調整力」

(豊かな人間性・コミュニケーション力・多様性への対応力)

【根拠】

中央教育審議会(2022年の「特別支援教育の推進」)で通常学級の多様化に対応するインクルーシブ教育の推進が明記される。

教育評論家の尾木直樹氏は「教師は子どもの最も身近な理解者であり、支援者でなければならない」とし、伴走する姿勢を重視している。

企業では、ダイバーシティ&インクルージョン(多様性を生かす組織運営)が必須の経営課題となっており、その基礎は学校教育で養われる。

【何ができることが求められるか】

子どもの発達段階や背景、特性を理解し、必要に応じて支援計画や合理的配慮を組み込める。
保護者・他職種(スクールカウンセラー、福祉、医療)と連携して支援チームを動かせる。
学級内で多様性を尊重し、いじめを未然に防ぐコミュニケーションを形成できる。

【どのような子どもを育てるか】

違いを価値として受け止め、共に生きる態度を身につけた子ども。
他者理解と自己肯定感を併せ持ち、安心して挑戦できる子ども。
自分の弱みも含め、他者に開示し助け合う協働力を持つ。



3 教育の専門職として成長し続ける「学び続ける力」(探究力・自己研鑽力)

【根拠】

中央教育審議会(2023年の「教師の資質能力の向上」)では、教師は学びをやめない専門職であり、リフレクションや研究に基づき授業を改善することが明記される。

教育社会学者の荻谷剛彦氏は「学校は過去の成功体験にしがみつくと子どもの変化に追いつけない」と警告している

企業でもVUCA(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)の時代に自己研鑽し変化対応できる人材が評価される。

【何ができることが求められるか】

教育の最新知見(認知科学、ICT、アセスメント等)を取り入れ授業を改善できる。
同僚と授業をオープンにし、フィードバックを受け合い成長する文化をつくれる。
子どもや保護者の声からも学び、教育実践を柔軟に見直すことができる。

【どのような子どもを育てるか】

学び続ける背中を見せることで、生涯学び続ける姿勢を自然に伝える。
自分の課題を自覚し、改善しようとするメタ認知力を育む。
新しいことを楽しみ、変化を前向きに捉える子ども。

まとめ 「学び続ける力」はさておき、中学校の教育活動で「学びのプロデュース力」と「関係調整力」は、総合的な学習や特別活動で取組みやすい領域です。松岡先生の単元開発シートを活用することで、「学びのプロデュース力」が増します。「関係調整力」は、フィードバックが役立ちます。教師として求められる力を育てていきましょう。

